

## 【実践報告③】

# 主体的に考え、判断し、行動できる生徒の育成

東浦町立北部中学校

## 1 はじめに

北部中学校は、今年度50周年を迎えた中規模校である。開校時からオープンスクールを念頭に置いた校舎設計がされており、ラーニングスペースやホールといった広い学習スペースが通常の中学校の廊下にあたる部分にあることが大きな特徴である。

本校には緒川小学校と森岡小学校の二つの小学校の児童が3対2の割合で入学してくる。真面目で言われたことにしっかり取り組む生徒が多いものの、学習や行事等に主体的に取り組む、自分たちの力で進んで物事を進めていく部分が、やや弱い傾向がある。



教室前のラーニングスペース

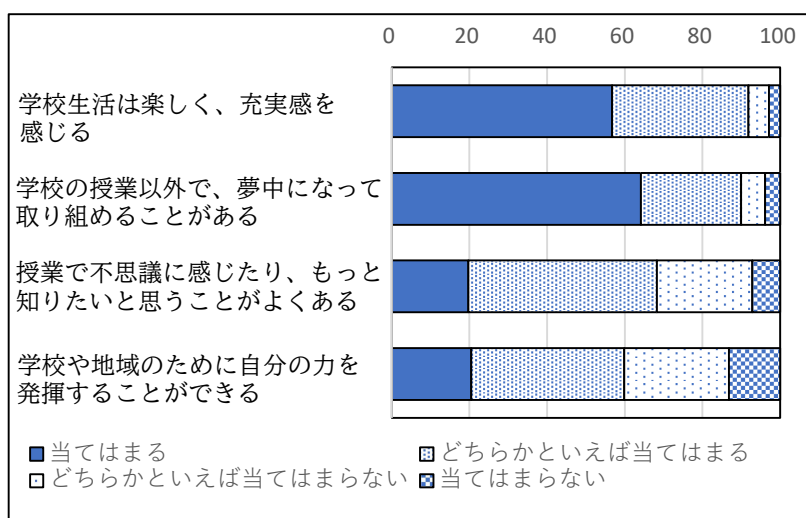
## 2 実践の内容

### (1) 令和5年度の取組

#### ア 生徒の実態把握

研究の最初に行ったアンケート結果（資料1）では、「学校生活は楽しく、充実感を感じる」「授業以外でも夢中になって取り組むことがある」と答える生徒が多いことが分かった。その一方で、「授業で、不思議に感じたり、もっと知りたいと思うことがよくある」「学校や地域のために自分の力を発揮することができる」の項目が低く、主体性に課題があることが分かった。

【資料1 生徒アンケート結果】



#### イ 生徒を中心に据えた取組への挑戦

##### (ア) 過去の取組（導入部分の工夫と自学の時間の設定）

本校では、これまで、二つの取組を行ってきた。

一つ目は、導入部分の工夫である。生徒が主体的に学ぶことを期待し、単元の導入において生徒の興味・関心のあるものを取り入れる工夫を行ってきた。確かに導入時における生徒の参加意欲は高まったものの、それは導入時にとどまり、単元を通して生徒が意欲的に学び続けることができないという課題が残った。

二つ目は、自学の時間の設定である。生徒が自ら選択し、学習に取り組めるよう、1時間の授業内に自学の時間を設定した。生徒は、さまざまな教材の中から課題を選択し、学習に取り組むようになった。この取組では、生徒が自分で選択し、最後までやり遂げようとする姿が見られた。しかし、教師が準備した課題や選択肢等のタスクをこなすだけになり、主体的に学ぼうとする姿までは至らなかった。

【資料2 研究構想図】

(イ) 生徒を中心に据えた取組へ

これらの取組で明らかになった課題から、生徒の主体的な学びを妨げているものは何か考え、根本的に教師の教育観を見直す必要があると考えた。「教師が教える」という考えから脱却し、「生徒が学ぶ」という生徒を中心に据えた視点で研究を進めることにした。

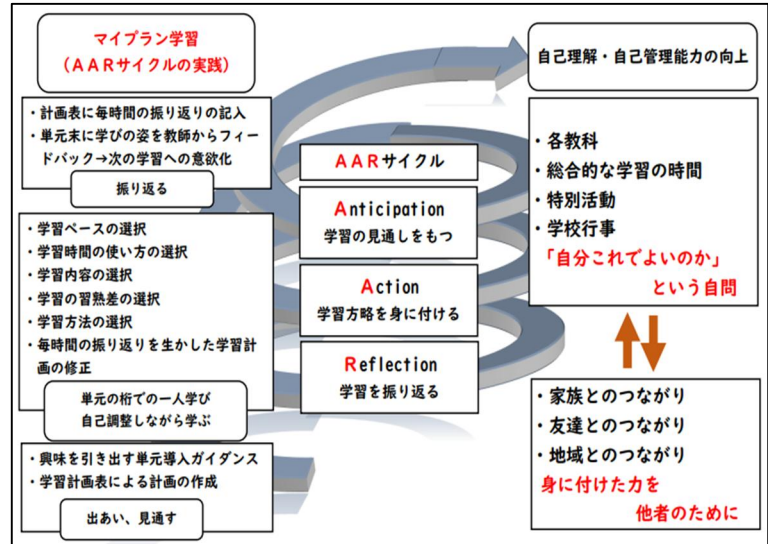
生徒を信じて学習を委ね、生徒が自分たちで学習を進めることを研究の中心に置き、AARサイクルを回すことを意識した「単元内自由進度学習」を取り入れ、研究を構想した(資料2)。この単元内自由進度学習を「マイプラン学習」と名付け、共通理解を図った。

(ウ) マイプラン学習について

マイプラン学習の基本スタイルは、単元の最初の1時間にオリエンテーションで学習の意欲化を図ったり、学習の手引(資料3)を基に学習の計画を立てたりする。次の時間からの学びは生徒に委ね、自分で立てた学習計画に沿って学習を進める。また、マイプラン学習のルール(資料4)を作成して全教室に掲示し、生徒も教師も学びに向かう姿勢を確認できるようにした。

毎時間の振り返りでは、次時の見直しをもてるよう計画の見直し・修正を行っている。最後の1時間は単元のまとめを行い、一人一人の学びの成果を共有し、協働的に学びを深める時間としている。教師も生徒の学びを紹介し、成果を価値付けることで次のマイプラン学習の意欲付けを図ることを大切にしている。

(2) 令和6年度の取組



【資料3 学習の手引】

★中国・四国地方★

目標(中国・四国地方)	知 技
●様々な資料から、地域ごとの人口の増加の様子やその要因を適切に読み取り、中国・四国地方の地域的特色を「人口や都市・村落」を中核とした考察の仕方を基に、理解し、その知識を身に付けている。	
●中国・四国地方の地域的特色を「人口や都市・村落」を中心とした考察の仕方を基に多面的・多角的に考察している。	
●中国・四国地方の地域的特色を考察した過程や結果を図や文章などに適切にまとめている。	
●中国・四国地方を「人口や都市・村落」を中心とした考察の仕方を基に、地域にみられる地理的事象や事柄を意欲的に追求している。	
●中国・四国地方の地域的特色に対する関心を高め、それを意欲的に追求している。	

学習の流れ

学習内容	教科書	学習整理	白地図
中国・四国地方の自然環境と人々の関わり	p.180~		
人口分布のかたよりと人々の生活	p.182~	p.32~	
都市部や農村部を結ぶ交通網	p.184~		p.14, 15
地域に根ざした農業と作り手の人々	p.186~	p.34~	
豊かな魅力を生かした地域活性化	p.188~		
☆チェックテスト④【日本の諸地域 中国・四国地方】☆			
中国・四国地方単元の振り返り		p.36, 37	
近畿地方の自然環境と人々の関わり	p.194~		
現在にいきつく歴史的都市の特色	p.196~	p.38~	
港町から世界へ	p.198~		p.16, 17
伝統を生かした産業と世界進出	p.200~	p.40~	
歴史を生かした観光業の推進	p.202~		
☆チェックテスト⑤【日本の諸地域 近畿地方】☆			
近畿地方単元の振り返り		p.42, 43	

【資料4 マイプラン学習のルール】

**マイプラン学習のルール**

- 目標を確認し、計画を立てる。
- まずは自力で問題解決に努める。
- お互いの学びを尊重する。
- 教室以外で学ぶときは、場所を伝える。
- それぞれの場所のルールを守って学びを進める。

徹底 凡事

## ア 社会科での実践

「近畿地方」と「中国・四国地方」の2単元の学習に同時進行で取り組んだ。オリエンテーションでは、近畿地方の各県で一番高い建物のランキングを見せ、何のランキングかを考えた。生徒は、「人口」「文化遺産の数」など、答えを考えて発表した。なかなか正解が出ないため、「単位はメートルです」と伝えると「建物の高さ」とある生徒が正解を答え、他の生徒からは驚きの声が上がった。その後「なぜ奈良県が一番高い建物でも46mなのだろう」と問いかけると、それぞれが真剣に考え始めた。これにより、生徒は近畿地方や中国・四国地方のことをもっと知りたいという気持ちが高まった。その後、生徒は前頁資料3のような学習の手引を参考に学習計画を立てた。その際、単元の目標と単元の構想をしっかりと伝え、いつでも確認できるように学習の手引にも明記した。このようなオリエンテーションを行うことで、生徒は学習の見通しをもち、単元を進める意欲を高めていった。

2時間目からは、自分が立てた学習計画に沿って、一人一人が自分のペースで学習を進めた。学びは生徒に委ねられ、学ぶ方法、時間、場所も生徒自ら決定して進めていく。

授業は、生徒は教室だけでなく、資料5のように教室を出て、ラーニングスペースで学習をする生徒もいる。教科書で学習を進める生徒も、タブレット端末を使ってグループで学習を進める生徒もいる。

教師は学びを支えるために、生徒を見取っていく。手が止まっている生徒には、学びの内容や計画を確認して助言をしたり、他の生徒との関わりを増やす声かけをしたりした。

## イ 数学科での実践（令和6年度）

マイプラン学習では、早く学習を終えた生徒のために探究的な課題を用意している。資料6は「変化と対応」の単元で学習が早く終わった生徒が「線香の燃える時間と長さが関数になるのか」という課題設定をして実験を行い、それを表にまとめたものである。

また、生徒が自分たちで学習を進めることができるように資料7のような学習環境を整えた。常に掲示しておくことで授業時以外にも見ている生徒がいた。

【資料5 学習場所・方法の選択】



【資料6 探究学習のまとめ】

線香の関数

式  
 $y = 13 - x$   
 $x$ は $y$ に反比例していないか関数ではある  
 条件 一次関数です

$y$ (分)	13	12.5	12	11.5	11	10.5	10	9.5	9	8.5	...
$x$ (cm)	0	0.5	1	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	...

【資料7 学びを支える学習環境】



## (3) 令和7年度の取組

本年度は、自ら学ぶ力の更なる向上を目指し、マイプラン学習での「コースづくり」と「学習環境づくり」の2点に力を入れてきた。

### ア コースづくり（数学科）

マイプラン学習の中で、生徒の興味・関心や習熟度を考えてコースを設定した。

数学の平方根の単元では「スタンダードコース」「探究コース」「操作・感覚コース」という3コースを設定した。資料8の説明例のように、コースの特性や、コースで何ができるのかななどを明記し、解像度を高めることで生徒が選択するための手助けとした。

#### ① スタンダードコース

スタンダードコースは、自分のペースで問題演習を進めるコースとした。教師は練習問題、授業動画、プリントの解説動画（資料9）などを用意し、タブレットでいつでも参照できるようにした。生徒は、難易度に合わせた練習問題に取り組むが、問題につまずいたとき、解き方を確認したいときに、その動画を活用して問題に取り組んだ。

#### ② 探究コース

探究コースは、難易度の高い課題について調べたりアウトプットしたりするコースとした。生徒は、「黄金比に $\sqrt{\quad}$ が使われている」といった日常生活に潜んでいる $\sqrt{\quad}$ を探し出す課題等（資料10）に、楽しみながら熱心に取り組んだ。

学習のまとめの場面では、文章、スライド、説明動画等のアウトプットの方法を自分で選択した。生徒の振り返りからは、課題について詳しく調べ、自身の学びが充実していたことがうかがえる（資料11）。

#### 【資料11 探究コースの生徒の振り返り】

- ・平方根の大きさを比べるポイントや $\sqrt{\quad}$ がついている問題が分かった。
- ・追加課題を調べたところ、 $\sqrt{\quad}$ の記号の由来が、ラディックス【根】ということが分かった。
- ・ $\sqrt{\quad}$ は、ゲームやデータ分析で使われている。

#### ③ 操作・感覚コース

操作・感覚コースでは、数学に苦手意識のある生徒が具体物やゲームを楽しみながら学習を進めるコースとし、「正方形づくり」「平方根暗記チャレンジ」「語呂合わせづくり」「ルートランプ」の課題に取り組んだ。資料12はルートランプの例である。数字が $\sqrt{\quad}$ 表記になっており、神経衰弱やスピード、ババ抜き等のゲームを通して、自然と $\sqrt{\quad}$ の変換を行えるようになっていった。

生徒の振り返りからは、楽しみながら学習する活動を通して、「内容の理解」や「学ぶ楽しさ」を実感する様子がうかがえる（資料13）。

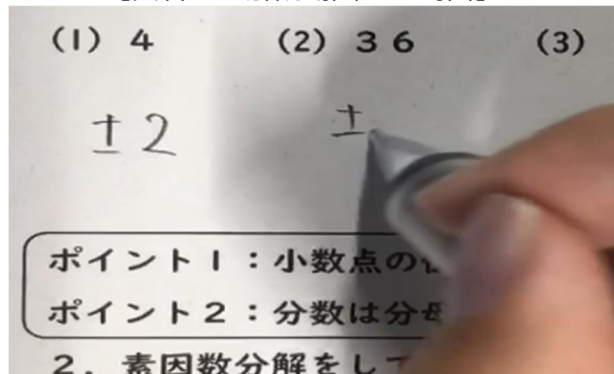
#### 【資料8 コースの説明例】

##### ①スタンダードコース

- プリントや新数学ノート、発展問題など、自分で問題を選んで進めることができる。じっくりやりたい人からどんどん進めたい人まで、対象が幅広いコースです。
- ・通常授業が希望の人は、黒板を使った授業動画を参考にしながら、学習を進める。
  - ・ゆっくり理解しながら進めていきたい人は、新数学ノートやプリント解説動画を見ながら一緒に進める。
  - ・数学の力を伸ばしたい人は、どんどん自分のペースで問題を解く。（解ききれないほどの問題やかなり苦戦するような難問も用意しておきます）



#### 【資料9 解説動画の一場面】



#### 【資料10 探究コース資料】



#### 【資料12 ルートランプ】



#### 【資料13 操作感覚コースの生徒の振り返り】

- ・トランプで計算をやったら、 $\bigcirc\sqrt{\Delta}$  から数字にもどすやつを理解することができた。
- ・トランプを使うことで苦手なところも楽しく学ぶことができた。

これらの内容から、自分なりに内容の理解を深めたり、数学が苦手でも活動を楽しみ、理解できた喜びを感じたりしていることが分かった。どの生徒も学びの楽しさや意義を実感し、力を付けていることを感じることもできた。

## イ 学習環境づくり

大きなラーニングスペースには、各教科で学習する単元に関する教材の展示等を行った。ここでは、理科、社会科、国語科、英語科の取組例を紹介する。

### ① 実物の教材を常設で展示

資料14は、ラーニングスペースに整えられた理科の学習環境である。実物の化石や火山灰に触れることができたり、常設した顕微鏡で石灰岩を観察できたりするコーナーを設置した。

これから学ぶ単元の資料を常設することで、生徒は、単元の学習に対する意欲と見通しを高めることができた。また、常設することで、生徒は、授業内だけでなく休み時間中にも展示に触れ、他クラスの生徒とも情報交換をする姿も見られた。

【資料14 理科の学習環境】



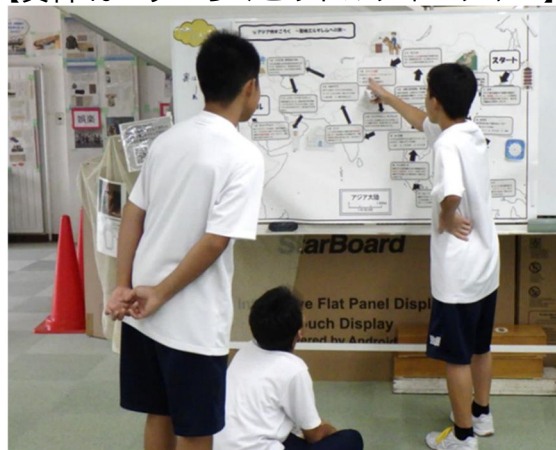
### ② 物的な学習環境の充実

社会科では、楽しみながら学習に取り組めるように、すごろくのマスに課題や解説を示した学習環境を用意した(資料15)。

仲間とすごろくを進める中で、一人の生徒が、中国内陸部と沿岸部の格差について、リトルティーチャーのように説明をし始めた。それを聞いていた生徒が、「そういうことか!」と納得し、その内容を理解するきっかけとなった場面があった。生徒同士の学び合いから、自らの考えを深めていく姿が見られた。

また、国語科の敬語の学習単元では、すごろくの教材の他、紙をめくると問題の答えが確認できる掲示物や、コンビニ店員になって敬語を実際に使う体験コーナーを用意した(次ページ資料16)。

【資料15 すごろくとリトルティーチャー】



すると生徒は、コンビニ店員になり切って敬語を使う練習に取り組み始めた。さらに、その活動を動画撮影し合い、動画を見合いながら、お互いの敬語の使い方について意見を述べ合っていた。自分たちで創意工夫し、楽しみながら学びを深める生徒の姿が見られたと言える。

これらのことから、学習環境は、生徒の自ら学ぶ力の育成を支える重要な存在であることが分かった。

### ③ 人的な学習環境の充実

学習環境づくりでは、教材だけでなく人的な学習環境の充実にも取り組んできた。

国語科では、スタンプラリー形式で、教師と敬語で会話する課題を設定した。

英語科では、「Which do you like (A) or (B)?」を使った会話を授業だけでなく休み時間や教室移動中に会った教師と英語で挨拶、質問、会話、確認サインをもらう活動を行った。

理科では、選択課題の一つとして「火を使わない防災食づくり」を行った。その際には栄養教諭の協力を仰ぎ、より専門的な観点を踏まえた実習を行うことができたため、生徒の学びが深まった（資料17）。

これらの取組は「特定の授業の中だけ」「特定の教員とだけ」ではなく、さまざまな教員との関わりの中で行われていた。その結果、生徒は、日常生活の中で、教員に対して敬語を使って話したり、英語科以外の教員にも英語で話しかけたりする機会が増えた。課題を生かす対象を増やすことで、さまざまな場面で学びを生かそうとする生徒の姿が見られた。

【資料16 コンビニ店員敬語体験コーナー】



【資料17 栄養教諭の活用】



## 3 実践の成果と課題

### (1) 実践の成果

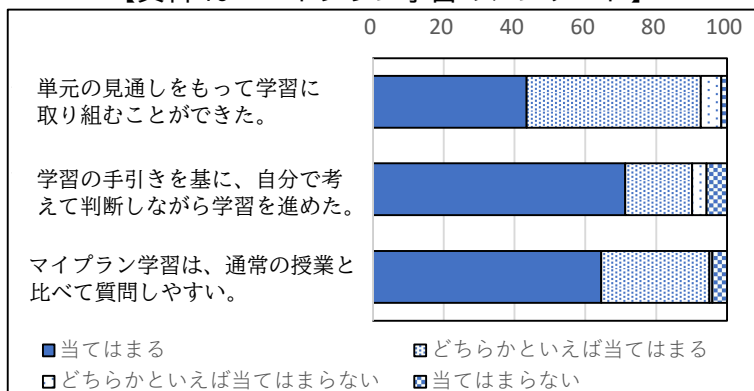
これまで多くの実践を重ねてきた中で、次のような成果が確認できた。

#### ア マイプラン学習について

資料18はマイプラン学習のアンケート結果である。

「見通しをもって学習に取り組むことができた」「自分で考えて判断しながら学習を進めることができた」の質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた生徒の割合は9割を超えた。このことから、生徒は、自ら学習を調整しながら、粘り強く主体的に学ぶことができてきたと考えられる。また「マイプラン学習では、通常の授業と比べて質問しやすい」と回答している生徒も多く、自ら教材や他者と関わろうとしていることがうかがえる。

【資料18 マイプラン学習のアンケート】



### イ マイプラン学習「コースづくり」

コースづくりでは、習熟度に応じたコースを設定したことにより、「できた」「分かった」という場面が増え、自信に満ちた顔で学習を進める生徒や、自分で学習を終えることができた達成感を感じる生徒が増え、主体的に自分で学びを進める生徒が増えた。また、興味・関心に応じたコースを設定したことで学びを楽しむ生徒が増えた。

### ウ 「学習環境づくり」

物的・人的に学習環境を充実させたことによって、自ら学びを広げたり深めたりする生徒が増えた。本校の大きな特徴であるラーニングスペースを活用し、学習環境づくりを進められたことは、研究の大きな成果の一つと言える。

また、休み時間にも生徒が教材を見たり触ったりして学ぶ姿が見られ、学びが授業の中だけで行われているのではないことも分かった。

### (2) 実践の課題

#### ア 学習の見通しを立てるための支援

主体的に学習に取り組む生徒が増えたのは確かだが、自分でうまく計画を立てられない生徒が一定数いる。学習の手引きの更なる改良と、生徒の学習の様子を見取り、個別に支援する方法を今後の実践の中で研究、検討をしていく必要があると考える。

#### イ 「R（振り返り）」から「A（学習計画）」へと、つなげる支援

毎時間の授業での学びは、必ずしも自分が立てた学習計画通りに進むわけではない。振り返りによって生徒が学びを自己調整する必要があるが、見通しが甘くうまくいかない生徒もいる。大・小含めたAARサイクルの「R（振り返り）」から「A（学習計画）」へつなげるための教師支援は、今後検討していく必要があると考える。

#### ウ 生徒の活動や進度の把握

マイプラン学習における効果的な学習支援を行うためには、教師は毎時間の授業の最初に、生徒が本時で取り組む学習の計画・内容を把握し、意図的・計画的に支援の手だてを講じなければならない。

また、教師の経験年数や自由進度学習への習熟度に関わらず、多くの教員が効果的に生徒の活動や進度の把握を行うための手だてを検討する必要があると考える。



学びを楽しむ生徒の姿



「自ら学ぶ力」を支える学習環境

## 4 おわりに

これまでの研究実践から、本校の生徒は、「マイプラン学習」の充実によって「AARサイクル」を回して「自ら学ぶ力」を育ててきていることが分かった。生徒の自ら学ぶ力を更に育成していくためには成果と課題を踏まえて、生徒の学びを把握し、つまづきに対して個別に支援することや、自己の学習を振り返る中で、自己調整力の育成を図りたい。同時に、学びに向かう学習環境の充実と、学校全体で人材の活用を進めていきたい。「子どもは有能な学び手である」という認識の下、生徒に学びを返して学びを委ね、生徒一人一人の学びを教科の専門性を生かして支援をしていきたい。